
大魔神るほーのありがたいお言葉

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔神るほーのありがたいお言葉

【Nコード】

N8204Z

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

小説を書くのが好きな主人公は、数日前から自分の話のラスボスの夢をみて……

(前書き)

物書きの人に元気を出してもらったらしいな。あと私のために書き
ました。

「なるほどな。やめたいのか？」

「ああ。だってさあ、誰も読まないのに書いてても意味ないだろう？」

「わしは別にかまわぬが、しかし今書いているものは終わらせる。せっかくわしが大復活し、ライアの奴をこてんぱんにのしているのだから」

俺の目の前で、牛の化け物みたいな大魔神るほーが腕を組んでそう言う。

「いやあ。今はいいけど。そのうちライアがあんたをやつつける予定なんだけど？」

「それでもいい。最後まで書け。じゃないとドリームランドから消滅してしまう」

「ドリームランド？」

「そう。お前があきらめた話のキャラクターが迷い込む世界だ。勇者ライアンの話を書き終わり、結構いるんな奴が救われたぞ。わしも助かった。元の世界で倒されるとわかっていてもドリームランドで消滅するのは簡便したいからな」

初めて聞いたぞ。

そんな話。

実は俺は今夢の中にいる。

どういつわけか3日前から夢でこいつ、大魔神るほーと話すようになった。

こいつは俺が今書いている『勇者ライアン2 - 大魔神るほーの大

逆襲』のラスボスだ。

1を書き終わって初めて小説投稿サイトに投稿して見たが、なにも反応がなかった。それでも続編を書きたいと思って書き始めたが、1ヶ月前から進まなくなり、もうやめようと思ったとき、こいつの夢を見るようになった。

明日小説を消してやると思って、寝たら、夢にこいつが出てきた。大魔神るほーということはすぐにわかった。だって、俺が生み出したキャラだもん。

俺は敵キャラながら、こいつの男気が大好きだった。だから2作目はこいつを復活させた。

「聞いているのか？」

「はいはい、聞いている」

「明日起きたら、書くんだぞ。じゃないと消えてしまつかもしれない」

大魔神るほーはぎろつと俺を睨むと消えた。

翌日、やっぱり俺は書けなかった。

というのは小説投稿サイトを見てしまい、やっぱり今日も読まれてないと思い、落ち込んでしまったのだ。

やっぱり、しょうがねー。

もうやめちまおう。

俺はその日、サイトから小説を消した。

「おい、お前、作品を消したたる？」

「るほー！お前、様子がおかしいぜ。体が半分消えてる」

夢に出てきた奴は上半身だけが残っていて、ふわふわと宙に浮いていた。

「お前のせいだ。1を消したたろう？だから2はなくなる可能性が高くなり、俺の体は半分になった」

「ごめん！」

俺は思わず反射的にそう謝る。

そんな影響があるとは思ひもしなかった。

「まあ、創造主にしてみればむしろなどどうでもいいだろうけどな。一度生み出されたものはこの世界に現れるんだ。そして物語が進めば、それは形となる。お前、3年ほど書いているがどれくらいの話をあきらめた？わしは知ってるぞ。20本ほどあきらめ、267個のキャラが消滅した」

「そ、そんなに？！知らなかった……」

「まあ、創造主なんてそんなものだ」

そつるほーが言っているとその角の先端が消え始める。

「時間だな。まあ。わしだけじゃなくて、あの忌まわしいライアンも消えるのは嬉しいがな。が、残念だ。ドリームランドから出て活躍したと思ったら、消えるなんてな」

「待てよ！そう決め付けるなよ！俺が絶対に！」

がばっ、

俺は目を覚ますとベッドから体を起こした。

そしてジャケットを羽織ると机に向い、パソコンの電源をつける。

「待ってるよ。るほー書き上げてやる！」

俺はそう決めると、まずは消した話を再度サイトに載せた。そして、誰も読んでいないのはずだがとりあえず、お知らせという機能を使い、作品を消したことを詫び、再度更新する。

「よっし、これでお前の体は消えてないよな。後は話の続きを書くだけだ」

実はプロットはできていた。

前作が読まれていないことのショックで書く気が起こらなかった。

でも今はやる気が100倍になった。

先ほど見た夢で、消え行くるほーを見て、これじゃだめだと思った。

「るほー待ってるよ！」

俺は気合を入れるとプロットを書いたメモと取り出し、打ち始めた。

「できたー!!」

近所の鶏が鳴き始めた朝方、俺は作品を仕上げた。

「これでお前は救われたよな！」

俺はるほーと会えることを思い、パソコンの電源を消すと、ベッ

ドに入る。

睡魔はすぐにやってきて、俺は夢の中にいた。

「おい、創造主！どうなってるんだ！」

るほーは、戸惑いながら俺の前に現れる。

「どうつて。いいだろう？うわ、マジでかつこいい。俺の想像通りよかったな」

「よかつたつて！俺はこんなこと望んでなかつたんだが！」

るほーはその端正な顔立ちをゆがめて、そう叫ぶ。

牛の化け物の姿は実は呪いの仕業でライオンに呪いを解かれて、るほーは元の王子様の姿になった。

「王子様、いい設定だろう？読者の度肝を抜いてやるぜ」

「……読者、いるのか？」

「うるせい。いるさ。一人くらいは。そんなこと言うなら、作品消すからな！」

「冗談だ！まあ、いい。倒されて終わりより、この方がまだ」

「まし？全然、すごいだろ？」

「るほー様？るほー様？どこにいらつしやるの？」

ふいに甘い声が聞こえる。それを聞き、るほーの顔が青ざめる。

それは、るほーの部下だった魔女めりーだ。牛からすっかりハンサムな王子様の姿になつたるほーを愛してしまい、今や完全にストーカーになっている。

大魔神だつたところは魔法を使えたが、いまやただの人間……。

毎日魔女から必死に逃げる日々を送っているという設定だ。

「くそ、めりーめ。じゃ、またな！とりあえず、悔しいが礼は言うておく！」

るほーは俺にそう言つと慌しく駆け出す。

「あん、るほーさまーん！」

長い黒髪に真っ黒な三角帽子、そして黒のワンピース姿のめりーがその後を追う。

俺は笑いながら二人の様子を見ていた。

その日、目覚めた俺は、完全に寝坊していた。

このまま行かないほうがいいかと思ったが、行かないと母が小遣いを減らすとか騒ぐので、慌てて身支度を済ませると学校に向かった。

その夜、俺は作品を見直した後、サイトに載せた。

相変わらず、読者はいないようだ。

でもまあいいや。

とりあえず俺が書いたことであいつは幸せそうだったし。

美形の姿で困った様子だったが、うれしそうにも見えたるほーを思い出し、俺はほくそ笑む。

そして、次の新しい話を書くべく、ワードを開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8204z/>

大魔神るほーのありがたいお言葉

2011年12月26日00時50分発行